**「スワーミー・ヴィヴェーカーナンダとマヤヴァティ・アドヴァイタ・ アーシュラム」**

**2024年2月17日**

**スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祭**

**スワーミー・シャマーナンダによる講話**

**於：逗子協会**

マヤヴァティは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが訪れた唯一の支部です。それは当時、インドにはラーマクリシュナ僧院の支部センターが他に存在しなかったからです。マヤヴァティに支部センターを設立するという考えは、スワーミージーがスイスのアルプスを訪れていたときに始まりました。その訪問中に、彼はヒマラヤの山中に支部を立ち上げることを思いつきました。スワーミージーの英国人の弟子であるセヴア夫妻は呼びかけに応じ、アルモラでそのための場所を探し始めました。しかし、アルモラはあまりにもにぎやかだったので、彼らは他の場所で孤独になれる場所を探し始めました。彼らはアルモラから130キロ離れたところにその場所を見つけました。そこは茶畑でした。彼らはその土地を購入しました。 1899 年 3 月にアドヴァイタ・アシーュラムが始まりました。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、もう 1 人の兄弟弟子であるスワーミー・シヴァーナンダとともに 1901 年にマヤヴァティを訪れ、15 日間滞在しました。

なぜスワーミー・ヴィヴェーカーナンダはマヤヴァティのこのアーシュラムをアドヴァイタ・アーシュラムと名付けたのでしょうか？理由の一つは、彼がアドヴァイタ哲学を非常に好きだったことです。二つ目の理由は、アドヴァイタ哲学に完全に専念する支部センターを少なくとも一つ望んでいたからです。

もう一つの理由は、宗教的対立のない普遍的で純粋な真実を教えられる場所を望んでいたということです。スワーミージーはアーシュラムについて次のように述べています。「その目的は、真理の探究者を訓練することであり、そして恐怖も迷信も持たない子供たちを育てることだ。彼らはお釈迦様、主キリスト、シヴァ神、ヴィシュヌ神などのいずれについても聞くことはない。最初から、彼らは自分の足で立つことを学ぶ。彼らは子供の頃から、神はスピリットであり、スピリットとして礼拝されるべきであると学ぶであろう」

それが、アドヴァイタ・アーシュラムに外的礼拝もセレモニーも存在しない理由です。スワーミージーご自身は、「像や絵を崇拝したり、ヴィラジャ・ホーマ（出家の儀式の前に行われる犠牲）以外の宗教的儀式や儀式を実践することは、アドヴァイタ・ヴェーダーンタの哲学の原則に反することである」と言いました。ここで重要なことは、「アドヴァイタ・アーシュラムで教えを受ける人は初めから、自分の足で立つことを学ぶということだ。彼らは子供の頃から、神はスピリットであり、神はスピリットとして礼拝されるべきであるということを学ぶであろう。それが理想である」と言っている点です。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの「自分の足で立つ」とは自分自身への信仰です。その無限性、無限の力への信仰です。スワーミージーは、自分自身への信仰を何度も何度も強調しました。このテーマに関する彼の発言をいくつか引用します。

「人と人との大きな違いはすべて、自分自身への信仰があるかないかであることが分かる。自分たちへの信仰があらゆることを可能にするだろう」

「世界の歴史とは、自分自身に信仰を持った少数の人びとの歴史である。その信仰は内なる神性さを呼びだしたのだ」

「自分自身を振り返ってみなさい。アメーバの状態から人間に至るまで、いったい誰がしたのか？あなた自身の意志だ。そうだとすると、それが全能であることを否定できるのか？あなたをそこまで高くしたものは、あなたをさらに高くすることができる」

「真の宗教は、内なるスピリットの目覚めよりくる。人々の教えや本の読書で得られるものではない。その結果として純粋で英雄的な行動がある」

「まず自分自身に信仰を持て。それが方法である。自分自身に信仰を持ちなさい。すべての力はあなたの中にある。それを意識して外にあらわしなさい。私は何でもできる、と言いなさい」

「真の信仰、真の宗教とは、私たちの真の自己への目覚めより来るものです。自分のスピリットに目覚めた者だけが、自分の足で立っていると言えるでしょう」

スワーミージーの言葉の意味を完全に理解するには、何度も何度も読まなければなりません。そうすることで少しずつ真の意味を理解できるようになります。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはアドヴァイタ・アーシュラムについて次の言葉で語りました。

「誰の中に世界はあるのか、誰が世界の中にいるのか、誰が世界なのか。誰の中に魂があるのか、誰が魂の中にいるのか、誰が人の魂なのか。その魂を知り、それが私たちの自己（つまり宇宙）であることを知ることのみが、私たちのすべての恐れを消し、不幸に終わりをもたらし、そして無限の自由に導くものである」

「どこであれ個人または多数の人々の愛の拡大、または福祉の進歩は、永遠の真理、すべての存在のワンネスの認知、悟り、そして実践によるものである。依存は不幸である。独立は幸せである。アドヴァイタは、人に自分の完全な所有を与える唯一のシステムである。すべての依存とそれの迷信を取り去ることによって、私たちを苦しみに対して勇敢にし、勇敢に活動させ、そしてやがて絶対的な自由を得させるものである。

これまで、この崇高な真理を、二元的弱さから全く自由な環境で説法することは不可能だった。このことが、どうしてそれが人類全般に対して有効に働かなかったかという理由であると確信する。

人々の人生を向上させ、多くの人類を啓もうする上で、この『一なる真理 (ONE ＴＲＵＴＨ)』をより自由でより広い範囲に与えるために、私たちはその最初の解放の地としてヒマラヤの高台に、このアドヴァイタ・アーシュラムを始める。

ここで望まれるのは、アドヴァイタがすべての迷信と弱くする影響から自由であり続けることだ。ここではユニティ（合一）の純粋でシンプルな合一の教義だけを教え、実践するだろう。他のすべてのシステムに全く同感するものではあるが、このアーシュラムはアドヴァイタ、アドヴァイタだけに捧げられたものである」

現在のアドヴァイタ・アーシュラムには多くの建物があり、アーシュラム本館や僧たちが住む建物などがあります。アーシュラム本館の正面向かい側には、プラブッダ・バーラタの建物があります。現在はこの雑誌の編集はマヤヴァティで行われていて、印刷や発行はコルカタで行われています。他にはゲストハウスや病院もあります。これらは木々の生い茂った山々に囲まれています。北側にはヒマラヤ山脈の山々が見渡せます。アーシュラムには農園と果樹園、そして池があります。アドヴァイタ・アーシュラムがなぜヒマラヤ山脈にあるのかについては先ほどお話しました。ある時、私はゲストの僧侶を山の上のある場所（ダルマゴー）に案内しました。登山道を登っていた時のことです。山道は両側に木々が生い茂っており、木の枝は道の上にまで伸びています。空には太陽が輝いていました。その時、僧侶は「ヴェーダには、まわりの木々や自然がすべて振動しているという表現がある。これがそのヴェーダの意味するところだ」と言いました。私たちがそれを感じるかどうかは別として、私たちは実際その影響を受けています。それは科学的にも証明されていて、私たちが木々に囲まれていて、自然の近くにいるとき、私たちの脳の一部が活動的になり、また私たちに安らぎをもたらすということが分かっています。だからアーシュラムが人里離れた山の中や自然の中にあると、心が安らいで瞑想によい影響をもたらします。シュリー・ラーマクリシュナも、霊的修行の初めには静かなところで修行することを勧めています。

チャーンドギャ・ウパニシャッドにはサッティヤカーマの話があります。物語によれば、サッティヤカーマは先生から痩せた牛400 頭を与えられ、その牛が千 頭になったら返すように言われました。彼は自然の中で牛が千頭になるまで何年も過ごしました。そして、突然一頭の牛が彼のところにやって来て、「私たちは千頭になりました。師の元に帰りましょう」と言いました。その牛はサッティヤカーマにブラフマンについて教え始めました。そして次の夜、彼らが暖炉にいると、火が彼に語りかけ始めました。私が皆さんに伝えたいのは、自然が人に話しかける、ということです。考えてみてください - 最初の聖者（リシ）たちは、どこからそんなに多くの知識を得たのでしょう？当時は書かれた聖典はそれほど多くありませんでした。彼らが学ぶ方法は二つしかありませんでした。一つは自然からで、二つ目は自分の中からです。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、「誰もあなたに教えることはできないし、誰もあなたを霊的にすることはできない。あなた自身の魂以外に教師はいない」「真の知識は自然との交流から生まれる」と言っています。そのため、アドヴァイタ・アーシュラムは大自然の真っただ中にあるのです。同じようなアーシュラムを見つけるのはインドでも困難なことです。マヤヴァティ・アドヴァイタ・アーシュラムは、二年前から信者たちのためにスピリチュアル・リトリートをゲストシーズンに開いています。これらのリトリートは、ヒマラヤの大自然の中で霊的修行の機会を与えることを目的としていて、毎回、多くの人や信者が遠くからきて参加しています。それを見ると、インド人々の霊的生活に対する情熱を感じます。

大自然の中で何を学べるかは、信者たちの霊的進歩の段階によります。世俗性から心が清まるほど、人は自然とより交流ができ、そして自然は自ずとその本性をあらわします。シュリー・ラーマクリシュナは、純粋な心と純粋な知性は同じであると言いました。アドヴァイタ・ディーピカという聖典には、心の清らかさのみが悟りの唯一の方法であると述べられています。主キリストも「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る」と言いました。それゆえ問題は、どのようにして心を清めることができるかということです。これまで見てきたように、すべての宗教は心の純粋さの重要性について語っています。仏教で心を清める道を「八正道」といいます。それは、

正しく物事を見て

正しく考え

正しく語り

正しい行い

正しく生活をし

正しい努力をし

正しい念を持ち

正しく瞑想することである

と教えています。

正しい行いをし、正しい生活を送るなら、それが私たちの心を清め、私たちを神へと導き、やがて神が何であるかを悟る時がやってきます。人類がホモ・サピエンスから現代人に至るまでには200万年かかりました。

何が人間のそのような発展をもたらしたのでしょうか？その原動力とは何でしょう？外からの何かが発展を助けたわけではありません。それは人間の内側にあるものです。私たちの進歩とは、何か新しいものを獲得することではなく、すでに私たちの中にあるものをあらわしていくことです。それはちょうど、種から植物や花が生まれるのと同じです。種子の中にすべてが含まれています。それが植物や花としてあらわるとき、私たちは外側のあらわれを見ます。

進化の過程とは、人間の中に隠されている本性の発現を意味します。私たちにとって未知のものは何もなく、ただそれが段階的にこの世界にあらわれているだけです。霊的な問題とは、隠されているものを知る必要があるのに、それを言葉を使って明確に表現することができないことです。隠されたものは、単なる知性では認識できません。それは肉体的なものや物質的なものではありません。限定されたものは物質ですが、限定されていないものはスピリットです。無限なものには形がなく、形のないものは知ることができません。なぜなら、知識とは、物事を限定して、それによって私たちはそれが何か知ることができるからです。それゆえ、隠されているものをスピリットと呼ぼうと、アートマン、ブラフマン、神と呼ぼうと、それは知られることのないものなのです。シュリー・ラーマクリシュナが言うように、ブラフマンは表現不可能な唯一のものです。心でそれを知ることはできませんが、心の清らかな人はそれを悟ることができます。実際、多くの人がブラフマンを悟りました。それゆえ、私たちは正しい生き方をしなければなりません。なぜなら、正しい生き方をしなければ、心が清まることがなく、悟ることもできないからです。

正しく生きることができるということは、その人がその段階にまで進歩してきたということを示しているのです。意識的であれ無意識であれ、皆がこの神性さをあらわそうとしています。スワーミージーはこう言いました。「それぞれの魂は本来神聖なものである。ゴールは内と外の自然性を制御することによって、この内なる神性をあらわすことだ。このことを、仕事によって、あるいは礼拝、心のコントロール、哲学のいずれか、あるいは複数、またはすべてを実行することによって行い、自由になりなさい。これが宗教のすべてである」

彼はまた、「宗教とは、人間の中にすでに備わっている神性さをあらわすことである」とも言いました。このような理由から、宗教は神になることであって、ただ神を信じることではないのです。あなたが自分の中に神を実現したとき、宗教は終わります。

スワーミージーはまた、すべての宗教の終わりは魂の中に神を悟ることであると言いました。それができたとき、人は自由を得ます。私たちの真の姿は、進化の途上にある神です。この進化は、自分の中に神の本性を完全にあらわすまで続きます。神があらわれたとき、私たちは自分が神であり、この世界も神であることに気づくのです。

家住者にとっては、この世と神の二つの間をとってやっていくこと、自分の力にふさわしいことをやっていくことがいいでしょう。重要なのは、この探求を続けることです。霊性の探求は長い旅です。私たちをこの道に導いてくださるのは、私たちの内なる神です。目的地に達するまで歩き続けましょう。

インドに40年間住んで感じることは、インドの歴史は宗教の歴史であるということです。インドに人があらわれたときには、宗教はすでに彼らとともにありました。ヴェーダの時代とウパニシャドの時代というように、それは現在まで途切れることなく続いています。したがって、宗教的性質はインド人の心に深く根付いています。

ある時、南インドから若い女性がマヤヴァティに来て、数日間滞在しました。彼女の顔を見たとき、私は驚きました。なぜなら、彼女の顔には彼女が非常に宗教的であるということが刻み込まれていたからです。通常、そのような宗教的な顔になるには、長期に渡って霊的な修行をしなければなりません。しかし、彼女はすでに宗教的な顔つきをしていました。おそらく彼女は前世でそのような資質を培ってきたのでしょう。そのような顔は、インドの寺で多くの参拝者を見ていれば、時々見ることができます。このような宗教的性質を持った信者がインドに多数存在するからこそ、インドでは宗教的伝統がこれほど長く途切れることなく維持されてきました。

インドでは、在家信者は僧侶よりも偉大です。それは、在家信者の支援がなければ、僧院の組織を維持することができないからです。同時に、僧院や寺院がなければ、心の平安のために家住者はどこに行けばいいのでしょうか？ボラノゴルにできたラーマクリシュナ僧院の最初の僧院は、この理由から設立されました。両翼があってこそ鳥は飛ぶことができます。インドの多くの巡礼地に行くと、多くの僧院や寺院を見ることができます。これらの僧院組織は多くの信者によって支えられていることを覚えておかなくてはなりません。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは「宗教はインドの背骨である。宗教を忘れない限りインドは長く続いていくだろう」と言いました。